
亜間乃と知可の旅の断章～都市イウとその周辺～

朱人

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

亜間乃と知可の旅の断章～都市イウとその周辺～

【Nコード】

N2613D

【作者名】

朱人

【あらすじ】

ときは第三次世界大戦後。亜間乃卓は戦前の高度な技術で作られた『知性可能性構造体』と共に、変貌した世界を旅していた。ある日、彼らは工業都市いイウを尋ねるが……。近未来SF。

亜間乃と知可

鈍行電車の中は、近くの工業都市で働く労働者たちであふれかえっていたが、その数も次第に減っていった。自分の席の前にスペースが空くと、一人の男が鞆からノート型のコンピュータを取り出した。コンピュータの背中側にはAmEと小さくロゴが入れてある。

男の名前を亜間乃という。年のころは十五歳程度、中肉中背で、その体を灰色のコートで包み隠しているためどのような性格の人間なのか周囲からは悟る事が出来ない。しかし、その目を覗き込めば年齢以上の苦勞と、なみなみならぬ強い意志を感じ取れるかもしれない。もつとも、その二つは何かから逃げ出す事によって身につけたものであったが。

彼はコンピュータのキーボードから文字を打ち込んだ。

<おはよう、知可。こっちは夕方だよ>

<夕方か。ひよつとして天気が悪いか、どこか密室に閉じこもっているのか？カメラに写る画像がいやに暗いんだが？>

このコンピュータAmEには、現代の技術力を遥かに凌駕した電子頭脳が組み込まれている。先の大戦中、ある国家が作らせたもので、人間と滑らかな対話が可能な程図抜けた性能を持っている。その電子頭脳「知性可能性構造体」を今の平凡なコンピュータでくるんだのが、AmEと名付けられたコンピュータなのだ。AmEにはカメラも取り付けられており、それで「知性可能性構造体」はある程度外の様子を伺い知ることが出来た。

<外の天気が悪いんだ、今雨が上がったばかりで。西日が射しはじめているけどそれも完全に晴れる前に太陽が地平線の下に隠れてしまうな>

<ふむ。今、ネットに接続し検索したが、気象予想では関東平野は午後から快晴とある>

<気象予想が当てにならないの知ってるだろ？>

文章入出力ウィンドウにこうしてどんどん対話が積み重なっていく。対話の記録は今の所途切れる事なく「知性可能性構造体」の内部に記録されている。一番最初の対話の記録を検索しようと思えば、画面にウィンドウが開き簡単に表示されるのだった。

< ああ。知っているさ。ところで、こうして私を呼び覚ましたということは、また例のやつを始める気らしいな >

< ああ。知可がいやでなければ >

亜間乃は「知性可能性構造体」のことを知可と呼ぶ。

< 嫌なわけがない。新しい世界のことを知ることが出来るのだからな >

< よし、じゃあ早速…… >

知可は大戦の後、ある企業複合体でその全機能の復活が試みられたが失敗に終わっている。彼らは全機能を復活させれば世界を支配下におくことが出来ると考えたようだ。

いまの所有者である亜間乃も、知可の全能力を復活させようと考えた。そのために日々起こった事を暇を見つけては入力し、知可に刺激を与えているのだ。知可の方でもそれを望んでいた。

別に亜間乃は世界を支配下におきたいと思っっているわけではない。ただ、本来の能力を発揮できていない存在が目の前にいるのが何となく許せなかつたのである。

< 今から一ヶ月ぐらい前になるかな。最後にA m Eを起動したのがその時だから、そうだな一週間かな。僕はイウ工業都市を訪れたんだ。そこでは太陽光を利用したバッテリーの生産で栄えてる都市でね……。そこでなかなかない経験をしたんだ >

< ああ。その都市を我々が訪れたところまでは私も知っている >
< そうかい、それでね >

今から一ヶ月前、亜間乃たちはイウ工業都市と呼ばれる、乾燥と湿っぽさ、腐敗と華麗さが入り交じった都市を訪れていた。道ばたにゴミや小動物が散らかっていたり、コンビニートの一角が産業廃

棄物が山積みになっていくかと思えば、美しいガラス張りの超高層ビル群や、いくつもの古代文明の神殿をスタイリッシュに組み合わせた「イウ執行責任者官邸」と呼ばれる建築物が町の中央にはあった。

先の大戦後国家という枠組みは大きく崩壊し、その隙間を超企業複合体と呼ばれる強力な軍事力と科学技術力を兼ね備えた組織が埋めた。しかし、それは国家の代わりとしてはどこか欠陥のある、まるで斜めに立った建造物のような危うさがあった。

亜間乃はこうした超企業複合体の中には組み込まれず、「旅人」と呼ばれる身分に属していた。「旅人」の数は全人口比から見るとそれほど多くなかったが、組織に属する事なく生きてゆくことの出来る彼らは、都市の人々から厚く尊敬されていた。彼らは都市から都市へと移動し、様々な生の情報を都市の人々にもたらしていた。

亜間乃がコンビナートと高層ビル街の中間地帯にあるカフェでコーヒーとサンドウィッチで軽い昼食を取りながら知可と対話していると、二人組の男が近づいて来た。亜間乃は慌ててAMEを鞆の中にしまい、代わりに鞆の中に入れてある銃に指の先を触れさせた。新しい都市では何事も警戒しなければならぬ。

「やあ。きみ、そんなでっかい鞆を持っているってことは旅人さんだよな」

背の高い、金持ちの坊ちゃんやんで今青春を謳歌していると思われるやせ形の男が話しかけて来た。

「そうだけど？」

「少し話を聞きたいんだけどなあ。いい？」

「外の世界の話、我々は聞きたいのですよ」

もう一人の男は、やはり二十代に達したか達していないかという年齢で、背が低いが筋肉質だった。凸凹コンビといってよいだろう。

「外の話……。大した話は出来ないと思うけど？」

「いいんだ、いいんだ。ここは僕らがおごるからさ」

「そうかい」

都市に入ると必ず何人かはこうして旅人の話を聞きにくる奴らがいる。話の重要度によっては見返りを求めなければならぬが、この連中ではそこまで深い話をする必要はないだろう。

「旅人さん、どうせこの都市は初めてだろ？なら、先ず僕たちがこの町の説明をするよ。知ってるかもしれないけどね」

「ああ。それならこつちにとつてもありがたいよ。教えてくれ」

「まず、自己紹介からだね。僕は和宇大志わつたいし。こつちの筋肉の固まりみたいなのが于和ゆわだよ」

「よろしく」

于和は慇懃に挨拶した。

「私の名前は亜間乃卓あまのすくろ。よろしく」

「さあ、何から話をしようかな。そう、この町は太陽エネルギーを強力なバッテリーに詰め込むような仕事で成り立ってるんだよ。極東超企業複合体の中では、他に四つ同じような都市があるけど、ここは新興の都市さ。そのかわり、紙のようにペラペラのバッテリーを作ったりとか、新しい技術は盛んさ！」

和宇大志はそう一気に喋った。

「ああ。聞き知っている。ここ数年で急激に成長した都市だってね。この都市の外でも結構有名だよ」

「そうか、有名なのか」

大志は少し肩を落とした。

「なに、有名なのは悪いことじゃない」

于和がそう慰めた。

「だよなー。でも、あんまり有名だと何か腹立つ……」

大志は下をうつむいてボソボソと喋る。多分彼は気分屋なのだろうと亜間乃は推察した。それにしても自分が住んでいるところが有名で腹が立つ、とは？あまり多数派ではない心境だろう。

「そうか。じゃあここが工業地帯になる前は何かあったの」

「何にもなかったんだよ。前の戦争でガラクタみたいたった土地以外はね」

そうだっただろうか。亜間乃はだいぶ前に一度旅人からこの都市の来歴を聞いたことがある。都市が成立する前に何かがあったはずなのだが。だが、底は深く聞かないことにした。

「まあ、こんな教科書に出てきそうな話旅人さんにはつまらないかもね。ここには遊べることもたくさんあるんだよ。執行責任者官邸の前の大通りはシヨッピング街になって服とか帰るし、ゲームセンターだって『栄都』と比べても見劣りしないんだよ。長く滞在するなら、旅人さん一緒に行こうよ」

「いや。それは遠慮しておく」

亜間乃は一人で行動する方が好きだし、一つの都市にあまり長く滞在しないことを信条としていた。

その後も大志はしばらく喋っていたが、ついにネタにつきると「今度は旅人さん。遠くの都市について話してよ」といった。

亜間乃はコップの底に残ったコーヒーを飲み干すと、北の都市曲臨で起こったことをぶっきらぼうに話しはじめた。

于和と和宇、そしてゲリラ

「へえ。曲臨が空中都市を作ろうとしてるなんて初めて聞いたな」
「私もです。よほど隠しておきたい情報のはずですが。旅人さん、
良くそんな情報を聞き出せましたね」

于和が驚きの表情を浮かべた。

「何。曲臨の労働者が勝手にべらべら喋ってくれたのさ。だからどこまで本当のことなのか分からないんだけどね」

亜間乃はこの二人を警戒しはじめていた。少しは旅の経験のある自分がここまで喋らされるとは……。

「それで？それはどんな都市なんだい？」

「本当に詳しく知らないんだ。何でも風揚げの原理を利用して……」
だが、亜間乃は最後まで喋ることが出来なかった。突然地響きが生じて彼は舌を噛みそうになる。地震か？いや、違う。どこかで爆発があったのだ。方向からしてこの都市の入り口付近で、だ。

亜間乃は素早く鞆を手にとったが、連続する揺れのせいではらく立ち上がることが出来ない。カフェにいた連中はみな椅子から転げ落ち、慌てふためいていた。

亜間乃の目の前にコーヒークップが落ち、粉々に割れる。ガラスにヒビが入ってゆぐが強靱に持ちこたえている。亜間乃は地面に跪く形で何とか体勢を保っている。がしゃがしゃと店の備品が次々に落ちる。亜間乃はコートを頭まで被り体を守る。例の二人は机の中に潜り込んでいた。

爆発音は四度連続したあとやんだ。都市の中は騒然となる。誰かが駆けてくる音が聞こえる。

于和は急いで机の中から飛び出し、よろめく和宇を引っ張りだし、支える。

「ちきしょ……。野蛮人のゲリラか。許さないからな」

和宇がそう言ったのを亜間乃ははっきり聞いた。亜間乃も立ち上

がり、カフェの外の景色を見た。

戦闘が始まっていた。

大きなレーザーライフルを抱えた男たち四人が、この都市の警察の追撃を振り切って走ってくる。

何か植物の繊維で作られたことが分かるごわごわした服に、古墳時代の貴族のような髪形をした彼らが都市の住人でないのははつきりと分かった。外部からの侵入者だ。

前方に三人、警察官が立ちほだかり、小型のレーザーライフルで侵入者を打つ。しかし当たらない。アスファルトで舗装された地面や建物が熱で溶ける。男たちも応戦する。射撃の腕は彼らの方が上のような。警官たちは一人、また一人と打たれ倒れてゆく。

この騒ぎで、市民たちはクモの子を散らすように立ち去り、逃げられなかったものはどこかの物陰に隠れた。遠くへ逃げられなかったものたちは、カフェの中にも逃げ込んで来た。

于和と和宇の姿はいつの間にか消えていた。

男たちはそんな市民には見向きもしない。警官たちを倒した彼らは、執行責任者官邸へと向かう。

他の市民が逃げ出して行くが、この都市に不案内な亜間乃はデタラメに行くしかなかった。細い道を右へ左へ、ところが、突然その歩みが止まる。その道は大通りへと繋がっていたのだ。例の侵入者たちが、大通りに三十人程集結して執行責任者官邸へと向かおうとしている。

そこへ、装甲車が三台、彼らを包囲するようにして現れた。警察官とは違い完全武装の兵士たちが数えきれない程乗っている。

男たちは慌てふためいた。彼らは、この都市にこれほどの武力があるとは予想していなかったようだ。

「はっはっは。これが都市僕の実力さ。さあ、遠慮はいらない打っちゃえ！」

装甲車の拡声器から聞こえて来たのは和宇大志の声だった。何と

軍隊を指揮しているのは和宇のようだ。

軍隊は装甲車の上から一斉にレーザーを侵入者たちにあびせた。彼らに反撃のいとまは与えられなかった。

目がつぶれるのではと思う程の眩しい光が当たりに満ちあふれ、その後人間の肉や髪の毛の焼けこげる臭いが辺りに立ちこめた。その光景を狭い路地に挟まるようにして見ていた亜間乃はしばらく視力を奪われたが、頭の中は冷静だった。

この都市には敵対勢力が来て、彼らはゲリラ戦を行っている。彼らは城壁を爆薬で破壊して都市に侵入した。しかし、その力の差は歴然としているようだ。

亜間乃は視力が回復するのを待って、大通りからはなれた。

それから一時間もしないうちに都市イウの日常は回復した。侵入者の痕跡は跡形もなく消されていた。亜間乃は軍を指揮していた和宇大志について、市民にたずねた。

彼はこの町の執行責任者の一人息子だった。彼の親は極東企業複合体からこの地の開発をまかされていた男だった。市民の間では英雄的な扱われ方をしているが、どのような手段を使ったのか本当のところは闇の中だった。とにかく彼は、三十年かかって「荒野」だったイウを工業都市に変えたのだった。ただし、極東企業複合のトップ連中には頭が上がらないままだったが。

その息子の大志は、市民も詳しく知ってはいなかったが良くお忍びで仲間を引き連れ街を徘徊していたようだ。一見遊び人風だが頭は良く、今回のようにいざというときは都市の軍を指揮できる程の能力を持っていた。今では父親は、成人したばかりの息子に都市の運営を少しずつ任せはじめている。

成る程、そんな奴だから自分も貴重な情報を漏らしてしまったのか。亜間乃は少し納得した。

さらに亜間乃は市民からゲリラについての情報も聞き出そうとした。このことに関して市民たちは口が堅かったが、それでも当たり前障りのないことは教えてくれた。それによると、彼らはこの都市と北の山岳地帯の隙間、開発の手が行き届かないところで生活しており、時おり都市に降りて来ては略奪行為を行い、手を焼いていたそうだ。しかも今回、警戒していたにもかかわらず都市の深いところへまで侵入を許してしまったのは完全にたるんでいたからだ、と一人の市民はいった。

カフェや路地の軒下で話を聞いている間中、町を洗い流すように小雨が降り注いでいた。太陽が完全に地平線に没した頃雨はやんだ。明日、この町を出ようと亜間乃は決心した。

亜間乃とサイス

翌朝、亜間乃の予想とは違い小粒の雨がパラパラと降っていた。A m Eで検索した情報によれば午後から晴れるはずなのだが、信賴してよいのかどうか分からなかった。

亜間乃は西から来た。そのまままっすぐ東へ突っ切っていけば一ヶ月で別の都市へつくはずだった。リュックのようにもシヨルダールのようにも使える鞆の中には野宿の道具も入っていたが、店を回って必要と思われるものを買い足し、レインコートのフードを被ると彼は都市イウをあとにした。

都市イウの破壊されたコンクリート製城壁は修理が始まっていた。彼は地図とコンパスをたよりに東の村を目指した。都市の周りは植物が全く生えていなかったが、そのうち背の低い灌木や特定の種類の草が生えた草原に出た。

少女が一人、草むらの中にうずくまっていた。足にレーザーで受けたもの特有の傷が出来ていた。昨日のゲリラに少女も混ざっていたのだ。

亜間乃が近寄ると少女は慌てて立ち上がり、ボロボロになったホルスターから小型の銃を取り出し亜間乃の方へ向けた。それと同時に、亜間乃も少女に向けて銃を構える。

「まで。私はあなたに危害を加えるつもりはない」

亜間乃は言う。

「お前、旅人か？追っ手じゃないんだな？」

少女は震える声で言った。

「そう。旅人だ。あなたをどうこうするつもりはない」

彼女は亜間乃の目をじっと見ていたが、やがて銃をおろした。亜間乃も銃をおろす。

「あなた。昨日のゲリラの生き残りだな」

少女は返事をしなかったが、答えは分かりきっていた。

「こんな雨の中、草むらにうずくまって……、死を待つようなものだ」

「うるさい！」

「助けてやると言ってる。あんたらの住処まで運んでやってもいい。どうだ？」

「なぜわたしを助ける？」

「放っておいたら寝覚めが悪いからさ」

亜間乃は自分の銃をコートのしたのホルスターに戻した。

「旅人は人と深く関わることをしないと聞いた」

「場合による。さて、私の鞆の中に、液体タイプの被覆剤がある。

これでその傷口が外気にさらされればなしになって化膿するのを防ぐことが出来るはずだ。あんたらが住んでいる場所は大体知っている。山の麓の森林地帯だな？歩けないのなら私がいけるところまで肩を貸してもいい」

亜間乃は自分とほぼ同年代の少女にこりと笑ってみせた。少女は笑わなかったが、傷口被覆剤を受け取って、太ももに出来ている焼けこげた傷口の上から塗った。

「さあ、塗り終わったらつかまれよ」

亜間乃は肩を差し出した。だが、少女は首を横に降った。

「もうあまり痛くないから大丈夫だ。痛み止めが入っているのか？」

「ああ。そうらしいな。だが、いいから肩につかまれ」

「お前みたいな男は嫌いなんだ。虫酸が走る」

と、少女。亜間乃は眉をしかめ、怒鳴りつけてやるうかと思っただが、少女の哀れな姿を見て思いとどまった。

「私の名前は亜間乃卓だ。あんたは？」

「サイスだ」

「じゃあサイス。もう一度だけ言う。私の肩につかまれ」

サイスはしぶしぶ亜間乃の左肩に腕をまわした。その体温は氷のように冷たかった。

二人は歩き出した。

次第に草木の背丈が高くなっていき、今では二人の身長程になっていた。ついに雨はやみ、明るい太陽の光が雲の合間から降り注いで来た。

「さて、方向としてはこつちでいいはずなんだが。あとどのくらいでつく？ サイス」

「あと半日。このペースでも夜までにはつくだろう」

「成る程。君たちは森の中に住んでいるのか？」

「そうだ」

「都市に住まず、どんな生活してるんだ？ 今日日々都市の技術に頼らずに生活するなんて……」

「……」

「まあ、なんだかんだで多少は技術があるのかな？」

「うるさい。お前と話す気はない」

「そうかよ」

亜間乃はこの少女に腹を立てていた。腹を立ててはいたが嫌いにはなれそうになかった。助けてもらってなおへりくだらずに堂々としている姿は好ましかった。

次第に二人は尖った葉をもつ木々が生い茂る森林地帯へと足を踏み入れた。

「サイス。あんた、飲まず食わずだったな。あそこにでかい木が倒れて開けた場所がある。あそこに座って、私の持つてる固形食料と水を飲もう。都市の清潔な水だぞ」

「ふん。都市の水なんて何が入ってるか分からない」

「かもな。今じゃ自然の水もきれいになってるからな。私も旅路では普通に小川の水を飲む」

亜間乃やサイスが生まれる少し前に終結した戦争は、大地を人が住めないところまで破壊したとされる。それゆえ人々は多少居心地

が悪くても人工的に浄化された水のために都市に集住しているのがある。しかし、それは半ば迷信でもあった。旅人である亜間乃は、自然が驚くべきスピードで回復していることに気がついていていた。

二人は湿っぽい倒れた木の上に腰掛け、亜間乃の持っている固形食料を食べた。亜間乃が水筒からコップに水を出しサイスに渡す。

サイスはそれを一口飲んでしかめっ面をした。

「うわっ。薬臭い」

サイスは水を口に含んだがすぐに吐き出した。

「我慢しろよ。それしかないんだから」

「仕方ないな。私も咽がからからだ。もらっておく。ありがとう」

サイスは今度は水を一気に飲み干した。

「わたしたちのテントに行けばきれいな水の蓄えがいくらでもある」

「そうか。私も薬臭い水にはうんざりしてた」

二人は食事を済ませると立ち上がった。亜間乃はサイスに肩を貸そうとしたが、サイスはそれを拒絶して一人で歩いてみせた。本当にもう大丈夫そうだった。

さらに森の中をどんどんと歩いてゆくと、家畜の臭いが漂ってきた。サイスたちの住まう白いテントが見えてきた。

亜間乃と村の人々

森の中の白いテントは、大小合わせて四十はあった。亜間乃とサイスが近づくとテントの外で火を焚いていた一人の女が声を上げた。「サイス！それと……？」

その声を聞きつけてテントの中から次々に人々が顔を出した。「わたしだけか？」

サイスはそう言つて、泣きそうな顔になった。

サイスが説明してくれたおかげで、亜間乃たちはこの遊動民達の長老の家に上がらせてもらった。どうやら先のゲリラ戦で生きて帰つて来たのはサイスだけのようだった。村中が悲しみに包まれた。

「だから無理だと説得したのに……」

どうやらこの村の連中は、これまでに何度も都市イウを襲い、まずまずの戦果を挙げて来たらしい。ところが、都市イウの軍備が整えられているという噂が広がると、襲撃に対して及び腰になるものが現れた。長老とその周辺の人々がそれで、しばらくはこの森の中で生計を立てていけばいいではないか、戦利品がなくとも村は生きていける、と。それで村は二つの派閥に分かれ、そのうち急進派の人々が勢いで都市イウを襲ったのだと言う。村の皆は、彼らが生きて帰ってくることを願うと同時に、もう彼らの命はないかもしれないと思っていた。案の定、サイス以外の人々は都市の中で皆殺しにされた。

話を聞くと、彼らは本来都市イウのある場所で生活していたらしい。戦争終結後、土地が荒れ果てている中で、あそこは小麦や野菜などが育ち、また家畜を育てるための牧草も良く根付いたという。ところがそこに、突如極東企業複合体の連中が武力で彼らを追い払うと、鉄道を引き滑走路を設け、あつという間に畠をバッテリー工場に変えてしまった。元々住んでいた人々の中には、企業の手先に

なるものもいたが、ほとんどは都市の拡大とともに、森の中まで追いつめられてしまった。

森の中でも彼らは小さな畠を作り、牛を飼い、生活していた。しかし、どうしても自分たちを追い払った企業複合の連中が許せないのだという。そのため、村の若い連中はどこからか武器を手に入れ、何度も何度も都市イウを襲撃した。大損害を与えたこともある。しかしその度にイウは強化され拡大され、ついに今回にいたっては手も足もでないまま、全滅させられた。

村中は静まり返っていた。

長老はテントの中で亜間乃に干した牛肉とジャガイモのスープを振る舞ってくれた。テントの中の明かりは白く光る現代的なものだった。村のどこかに発電設備があるのだ。彼はサイスと亜間乃に、イウを襲ったゲリラたちの最後がどんなものだったか聞いて来た。

亜間乃は、彼らは勇敢だったと言った。サイスも頷いた。

「サイスだけでも生き残ってくれたのが嬉しい」

長老はそう言った。サイスは泣いた。

「さて。我々は村の男手を半分近く失ってしまった。今後はどのようになればいいのか？」

長老はそうため息をついた。

亜間乃はじつと考えた。そして口を開いた。

「長老。部外者の私ですが、こうして宿を貸してくれた恩義もあります。私から少し提案があるのですが」

長老は白い髭をさすって、亜間乃の方を見た。

亜間乃は旅人であり、色々な土地を見て来た。まだ手つかずの広大な土地も見ている。そうした土地に集団で移動してはどうかと長老に持ちかけたのだ。

「それは本当ですか？亜間乃殿」

「本当です。あの、北にそびえる山を越えた場所に盆地があります。

そこは葉っぱの丸い木々が生い茂った場所で、まだ企業の手も回っていない。ほとんどの人々が、そんなところに利用できる土地があるとは思っていない。あなた方ならそこで暮らしていけるはずです」「成る程……。この村にいる面々は、戦争中は要塞都市などで生活していました。しかし、皆戦争が終わると都市から逃げ出した。元々都市の暮らしには適応できないものどもなのです。ですから、あなたの申し出はとても嬉しい。しかし……」

長老は一人、眉をしかめて悩んだ。

「お祖父さん、村人全員を集めて、集会を開いたら？それしかないわよ」

サイスがそう言った。

亜間乃は驚いた。長老はサイスの祖父だったのだ。ということは多分サイスの両親はこの村にいないか、死んでいる。

長老のテントの前に、村の人々全員が集められた。人々は皆質素な服装に、古墳時代の貴族のような髪形をしている。亜間乃は長老の左隣に立った。

「本当にそんな土地なんてあるのかよ？」

「お前、都市イウのスパイなんじゃないのか？この土地を追い出して、自分たちの工場を造ろうっていう魂胆か？」

「それにどうやってその土地まで行くのよ。これだけの大人数で？」

村人たちは亜間乃にそうまくしたてた。反発は予想済みだったとは言え、これには亜間乃もこたえた。

「静かにしてくれ、みんな。この方はわしの孫、サイスを助けてこまで連れて来てくれたのだ。悪い人間ではない」

長老は静かにそう言った。皆は黙った。

「もう、わしらがこの土地で生きてゆくには限界がある。だから、いずれは都市イウに屈服し奴隷のようにこき使われるか、別の新天地を見つけて移動するかしか、道はないと私は思っていた。お前たちは、この土地でまだ生きていけるのか？」

長老は言う。年齢から言って彼は第三次大戦以前の幸福だった世界と、恐ろしい大戦、その後の世界を全て見て来ている。その彼の言葉は重い。

「俺たちも、それは長老の意見に賛成できません。でも、だからってそいつの言っていることが本当だとは分からない。俺たちをだまそうとしているだけかもしれない」

「そうよ。本当だと言う証拠を見せてよ!？」

証拠、証拠がないわけではない。亜間乃は鞆の中から地図の束を出した。

「皆さん。これは私の地図です。かつて私の先輩が持っていたものを引き写したものです。この地図を私の力で改良を加えました。その土地のことも、この地図に書かれています」

村人たちは地図の前に集まった。亜間乃は地図のある一点を指し示す。そこには確かに盆地が、人の誰も住んでいない盆地があつた。「あんた。さすが旅人だな。俺たちは地図なんて戦争以後見たことがない」

「ここを指しましょう。皆さんで。私が案内いたします」

夜中、亜間乃を含めた村中の人々ががやがやと話し合った。亜間乃について行くか行かないか。議論の争点はその一点だった。やがて、一つの結論が出た。

「移住はする。だが村人の全てが移住するわけではない。半分だ。半分がその盆地に移住し、様子を見る。そしてその盆地と、この森の村との交流は移住後も絶やさない。どちらかが倒れたときにどちらかに援助を出来るように」

長老が亜間乃にそう言った。亜間乃は頷いた。彼らの住居は軽く、元々移動に適しているため、出発は明朝と決まった。新たな遊動民の誕生だった。

和宇大志と村人と亜間乃

サイスが亜間乃と一緒に行くと言った。さらに村の人々のうち、男女合わせて二十人が亜間乃についていくことになった。

北の山から盆地に行くには、いったん南に迂回して最も登山に適した道から行かねばならなかった。一行が南の草原地帯にさしかかったとき、都市イウの方角から装甲車が十台程こちらの方角へ向かって来た。

村の人々は皆警戒してレーザーライフルを構えた。

装甲車から声が聞こえて来た。

「君たち。そんな武器で僕らにかかると思ってるのかい」

和宇大志の声だった。装甲車についた拡声器から聞こえてくる。

「あれからずっと君たちの動向を監視させてもらったんだけど。どうも、何を考えているのか分からない。一体どうするつもりなんだい？ また、僕らの都市を攻撃するつもりなのかい？それなら容赦はしないよ」

装甲車は村人たちを半包围する形で動きを止め、やはりレーザーライフルを構えた。どう考えても彼らの方が圧倒的に優位だ。

「攻撃は待ってくれ。頼む」

亜間乃が声を上げた。

「あれ、君はいつかの旅人さんじゃない」

再び和宇の声がする。彼は装甲車の一番安全なところに乗っており、決して姿を見せない。

「和宇、この村の人々は、もう都市イウに攻撃を仕掛けるつもりはない」

「攻撃を仕掛けるつもりはない？ じゃあ、みんなで連れ立ってどこへ行くつもりなのさ」

和宇の口調は相変わらず軽い。

「それを言う程、俺たちは甘くはないぞ」

村人の一人がそう言った。

「そう言うことだ。私たちはここからは見えない新天地へと向かう」と、サイス。

「フン。僕は旅人さんと話をしてたんだけどな。まあいいや。新天地？ 確かに未開発の土地はこの極東にいくつもあるさ。でも君たち、そんな人間が住める土地を企業複合がいつまでも放っておくと思うのかい？ いつか、複合体傘下の都市が作られちゃうよ。そうしたら君たちまた逃げ出すのかい？」

それがこの世界での真実だ。結局、弱いものは強いものに呑込まれていく。

「いつまでも企業複合体の力が強いとは限らない。かつての大戦がそのことを示しているように、高度な技術は綱渡りのなバランスの上で成り立ってる。お前たちが大事にしている都市文明が、いつまた倒壊するか分からないぞ」

亜間乃は精一杯虚勢を張っていった。

「今度はそうはならないさ。……この世界で、都会の生活に適応できないものは滅びるだけ、ってことだよ。逃げ延びる場所はどこにもないんだからね。君たちも、今から投降して、僕たちの工場で働いたらいい」

「調子のいいことばかり言いやがって。どうせ奴隷のようにこき使っただけだろうが！」

と村人。

「ふん。ばれたか。……、実は僕たちね、君たちの村を攻め滅ぼそうとしたところなんだ。でも、どこかへ移住する気らしいな」

和宇の声が低くなった。

「和宇様、ここで奴らを逃がすつもりですか？ それは人柄になく甘いというものでは……？」

今度は多分、于和の声だ。

「いや、いいんだ。僕も争いが避けられるならそれでいい。あんた

ら、どこへなりともいつちまえ。それより、僕は旅人さんに話がある」

そこで于和はいったん言葉を切った。

「旅人さん。あんた、ただ無目的に旅をしてるわけじゃないな」

「……」

亜間乃は黙った。

「旅人の中には、極東の首都栄都から来た内部スパイか、他の企業複合体から来た外部スパイって可能性もある。でも、僕が見たところ君はそのどちらでもないな。君の目的は何だ？」

「そう簡単に自分の目的を喋る程、私が甘いと思うか？」

「全て話せとは言わない。どうせ一日二日滞在したぐらいで大したことは分らないからな。だが、僕らは今、あなたたちを攻撃することも出来る。そうしたらどうなるか分かるな？」

「……ふん。そんな目的なんかないさ。私も都市に適応できず、集団生活にも適応できない、ただの旅人さ。時おり頼まれてスパイみたいなこともするが、イウでそんなことをした覚えはない」

『知性可能性構造体』のことは口が裂けても言えない。大戦前の技術だと知れたら知可は、研究されポロポロにされてしまう。たくさんのコードで繋がれ、過去の、誰も太刀打ちできない計算能力を利用したい、頭のおかしな連中によって。

「……、そうか。僕もただ鎌をかけてみただけで、本当に君の旅に目的があつただなんて思っちゃんない。いいよ。君たち、勝手に歩いていけ。僕らはイウに戻るぞ！」

和宇のその号令によってあっさりと引き上げていった。

亜間乃の生き方

鈍行電車の中で亜間乃はひたすらノート型コンピュータAMEのキーボードを打ち、知可と対話していた。

<それで、その村の人たちはその名もなき新天地にたどり着いたのかい？>

そうウインドウ上に文字が表示される。

<ああ。僕は彼らとともにその場所へ行き、そこで彼らとは別れたよ>

<彼らはそこで生きていけると思うかい？>

<厳しいと思うな。工業都市は雨後のタケノコのように増え、それに収斂されない人々はみな追いつめられて死滅するしかない。彼らが今頃家を建て、野菜を育て、狩りをして生計を立てているあの土地もいずれ工業都市が出来上がる。彼らはそれに呑込まれるか、のたれ死にするしかないだろう>

<君のように旅人になる人もいるかもしれない、亜間乃>

<ああ。だが旅人は特殊だ。私のように集団生活が出来ない人間が仕方なしになるのさ。彼らの中でどれだけそういった、孤独に耐えられる人間がいるのかどうか……>

亜間乃は目をつむり最後に彼らとかわした会話を思い出す。

「旅人さん、まだこの極東にこんな美しい土地が残っていたなんて！ここまで連れて来たことに感謝するよ！」

「旅人さん、あなた、良ければ私たちと一緒に暮らさないかい？」

私たちはあなたを歓迎するよ」

「いや、私は元々集団生活が出来ないタイプの人間だ。あなたたちとは暮らせない」

亜間乃は目を開け、再びAMEのモニタに目を落とした。

<人間とはあらゆる可能性を秘めているが、その可能性に殺されることもあるのだな>

亜間乃には知可が何を言っているのかいまいちよく分からなかった。しかし、それはかつて亜間乃の父が言っていた言葉に似ていた。

亜間乃の父は極東企業複合のトップだった。知可の内面を探り、過去の技術を復活させようとしていた張本人、そして村人から土地を奪って苦しめているその組織のトップが彼だった。亜間乃が父の手から知可の入ったA m Eを奪い去ったとき、父は亜間乃を止めようとはせずにこういった。

「私はあらゆる手を使ったが、知可の全能力を復活させることは出来なかった。お前ならそれが出来るかもしれない。だから、それはお前にゆだねる。絶対に壊すなよ。自分自身の可能性を殺すな」と。

要するに亜間乃がこうして旅をしているのは父の計算の上なのだ。それを思うと悔しいが、それでも彼は村人たちを救うことが出来た。彼は、世界を変えうる可能性をまだ手放してはいなかった。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2613d/>

亜間乃と知可の旅の断章～都市イウとその周辺～

2008年11月7日07時25分発行